

清里バイパス第1遺跡の陥し穴の若干の検討

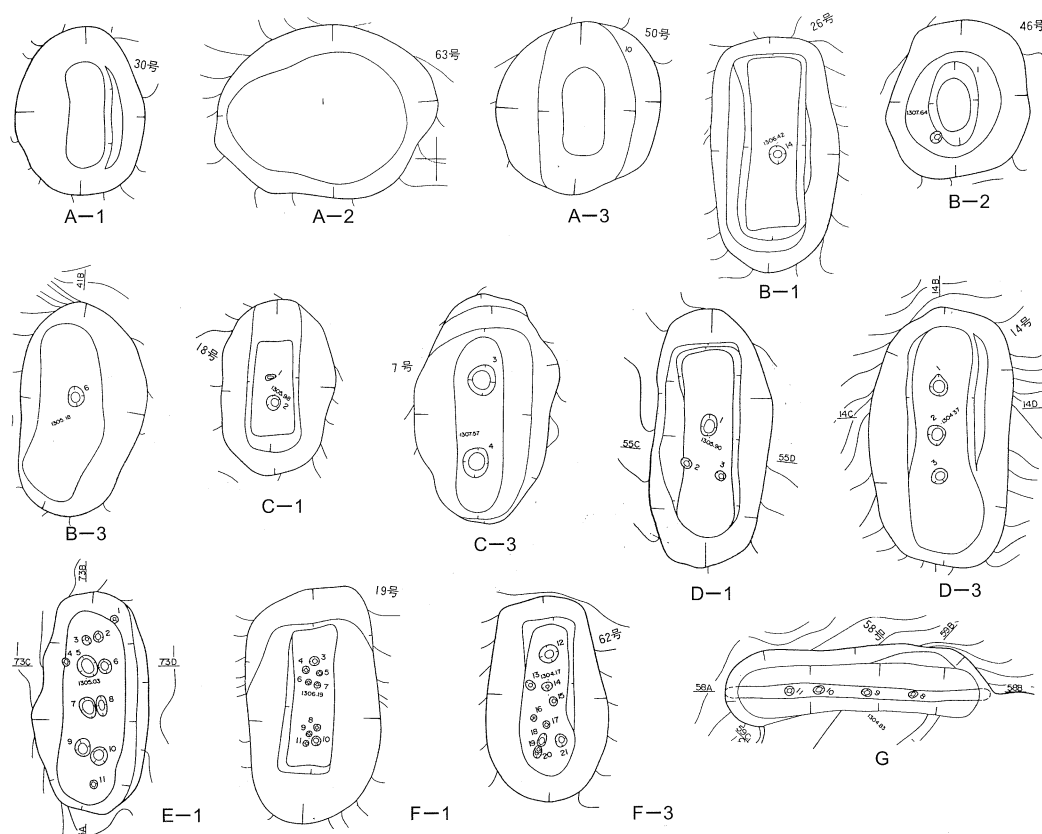
山 本 茂 樹

- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 1 はじめに | 4 覆土から見た陥し穴の分布および陥し穴の重複関係 |
| 2 陥し穴の形態分類 | 5 G形態について |
| 3 各形態別の地形図より見た陥し穴 | 6 まとめ |

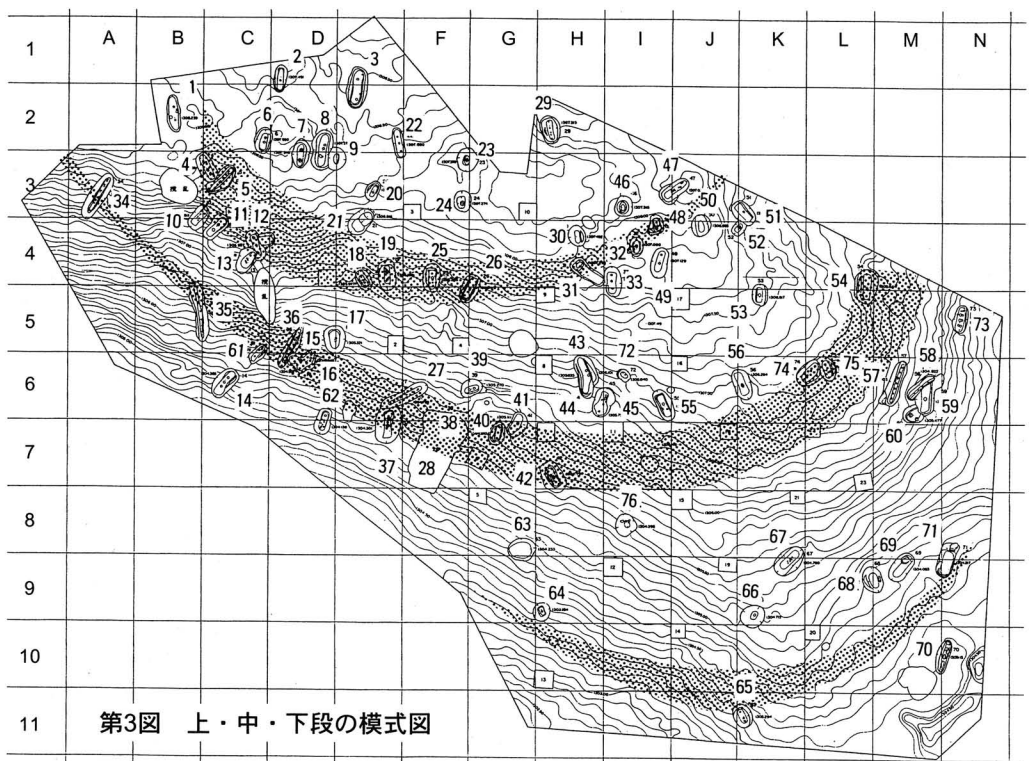
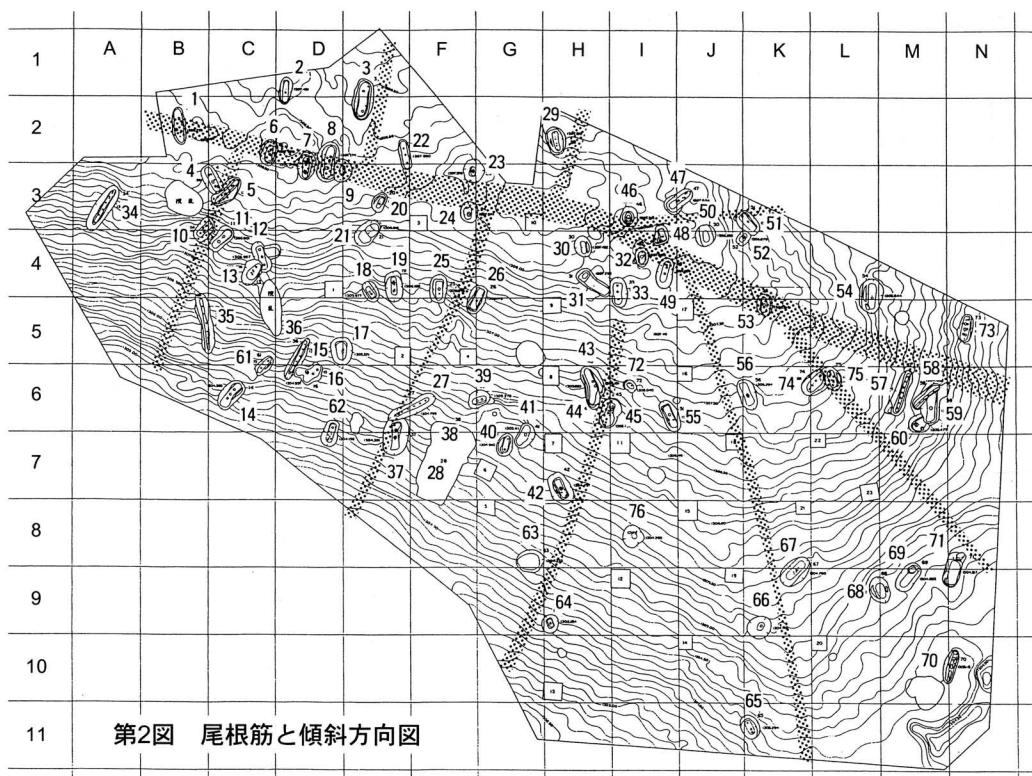
1 はじめに

1996年度の「清里バイパス第1遺跡」の発掘調査で、縄文時代の陥し穴と中世以降の陥し穴が発見され、『清里バイパス第1・第2遺跡』として報告されている。また本県では、広範囲にわたって調査された陥し穴は本遺跡がはじめてで、ほとんどが部分的な調査である。

本遺跡で陥し穴が掘られた分布を見るとほぼ斜面全体につくられ、しかも尾根筋（第2図）や斜面の中段に多く見られるようである。更に細かく見ていくと、陥し穴が密集する箇所と散漫な



第1図 陥し穴の形態分類



箇所と別れる。これは陥し穴の持つ性格からきているものであろう。この地は、現在森林地帯であり、その当時も木立が密集するところでもあったと考えられ、木立を避けて掘られたであろうことから、陥し穴が密集する箇所と散漫な箇所とに別れるのであろう。

また掘られた陥し穴も、一時期にこれだけの数、総数76基が掘られたとは考えがたいのであるが、しかし現実として時期を特定できる遺物の出土が認められておらず、陥し穴という遺構の性格上、遺物がほとんど出土しないのはいたし方のないことと思われる。

そこで陥し穴を一定の基準で分類するとともに、確認面上での覆土の相違や重複関係による長軸方向によって時期的な変化が認められるものかどうかを検討してみたいと思う。

2 陥し穴の形態分類（第1図）および各形態の分布図（第5.6.7.8.9.10.11図）

陥し穴の形態は、AからGまで分類することができる。分類基準は、床面にあけられた小穴の本数を基準として行った。これは、陥し穴の規模や上部の平面形態によってでは、木立を縫って掘られたであろうことを考えた場合、限られた空間内で陥し穴が掘られ、規模・平面形態ではとらえきれないと思われたからである。

まずA形態であるが、床面に小穴が認められないものとした。B形態は、床面に1本の小穴があげられているものとし、C形態は2本の小穴が床面にあげられているものとした。D形態は3本を基本としたもの、E形態は2本を1対として小穴があげられているものとした。F形態は、床面に小穴が多数あげられているものとし、G形態は細長い長楕円形のものとした。

各形態については、床面の形状から更に3分類が可能である。1類は、床面が長方形を呈するものとし、2類は円形を呈するもの、3類は楕円形を呈するものとした。各類の基準で長方形と楕円形の区別は外見上で行い、計測値による区別では行っていない。なお、床面の形状で円形を呈するものは、楕円形のような特に長軸を長くとするものについては認められない。

A形態は、A－1類からA－3類まで分けられる（第5図）。

A－1類 NO30.31.69.71（4基）

A－2類 NO21.63（2基）

A－3類 NO9.50.68（3基の計9基）

B形態については、B－1類からB－3類まで分けられる（第6図）。

B－1類 NO2.16.20.23.26.32.38.42.48.51.52.53.54.56.59.64.66（17基）

B－2類 NO24.46（2基）

B－3類 NO41（1基の計20基）

C形態については、床面の形状で円形を呈するものは認められない（第7図）。

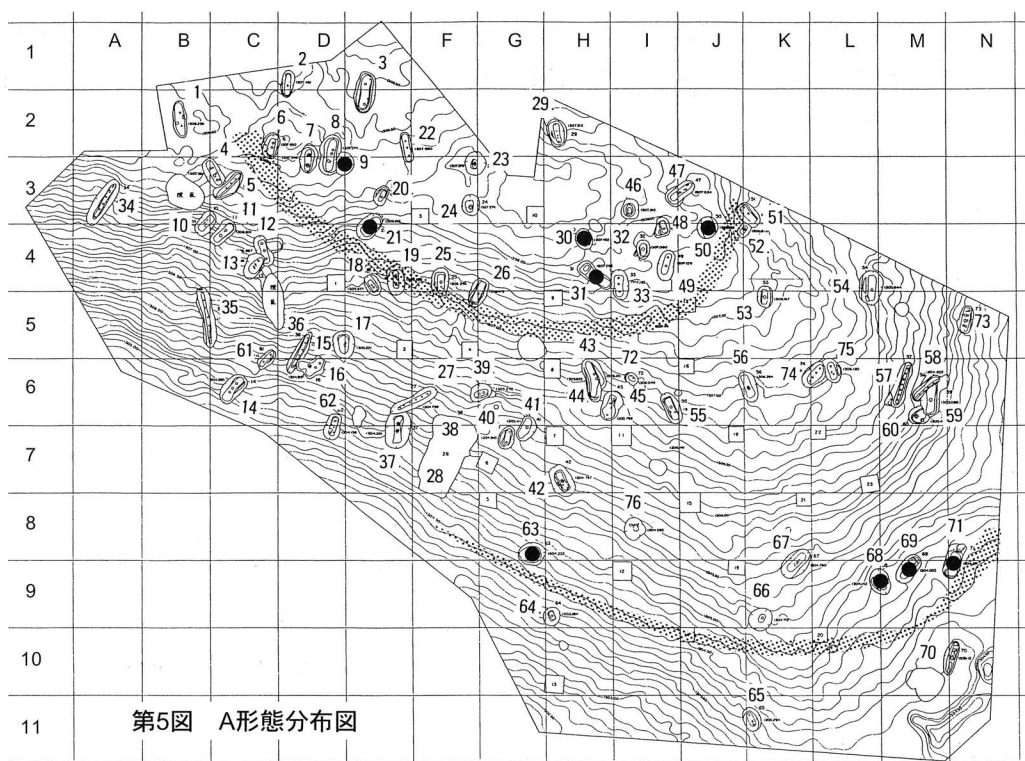
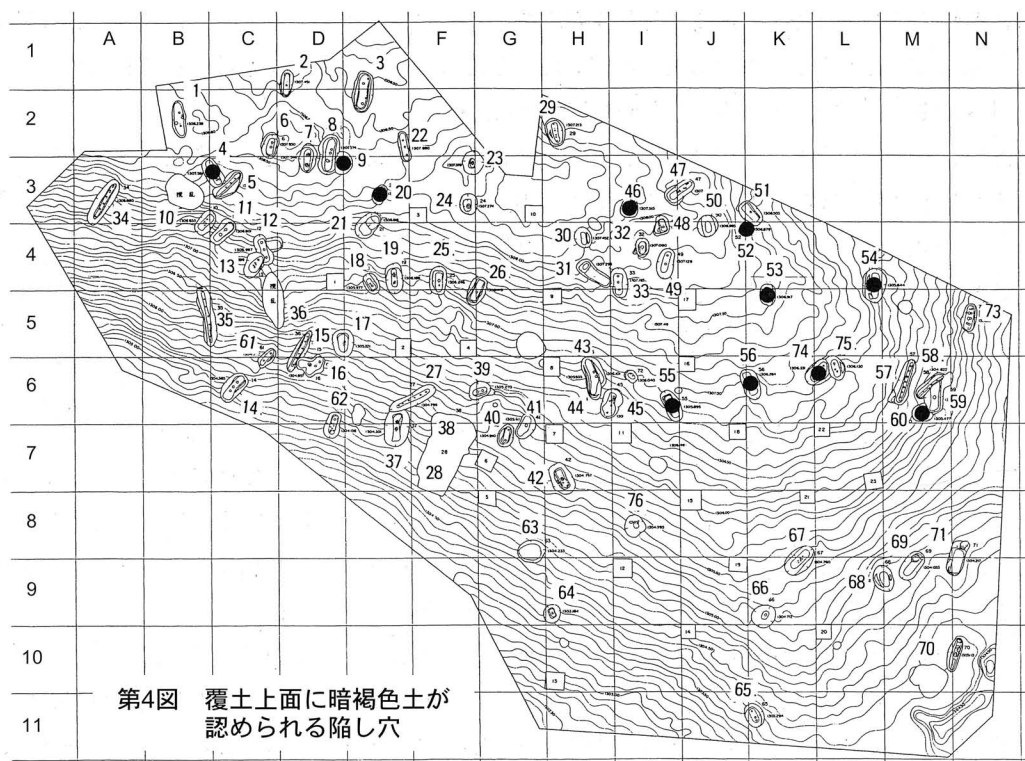
C－1類 NO6.15.18.25.37.49（6基）

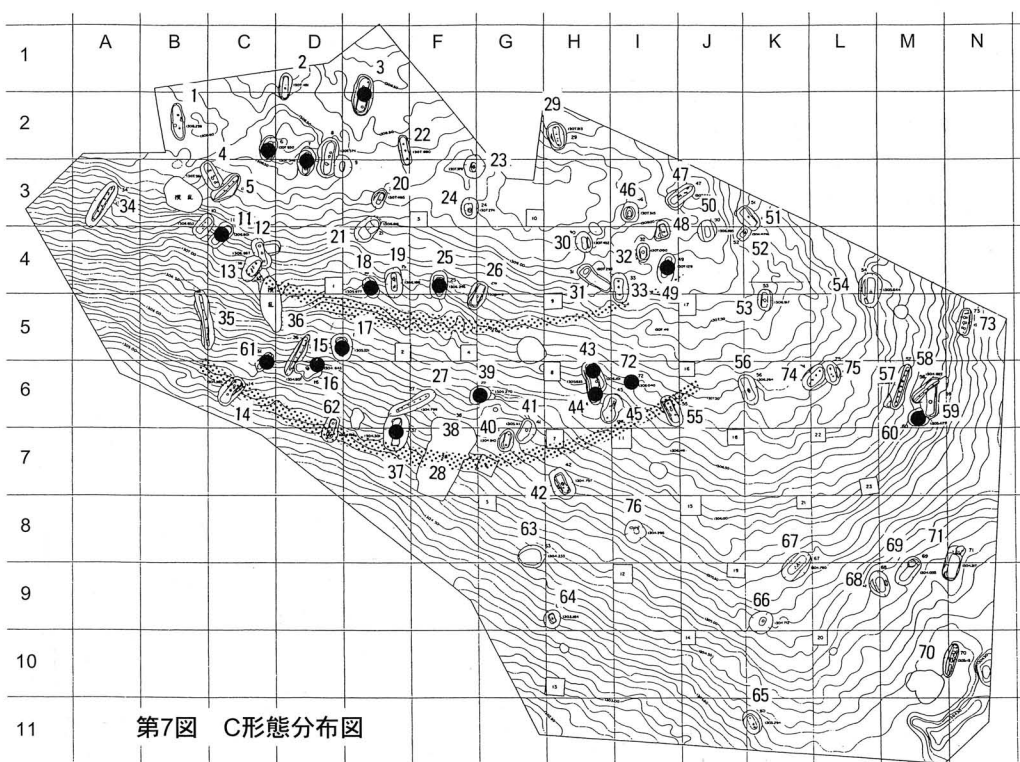
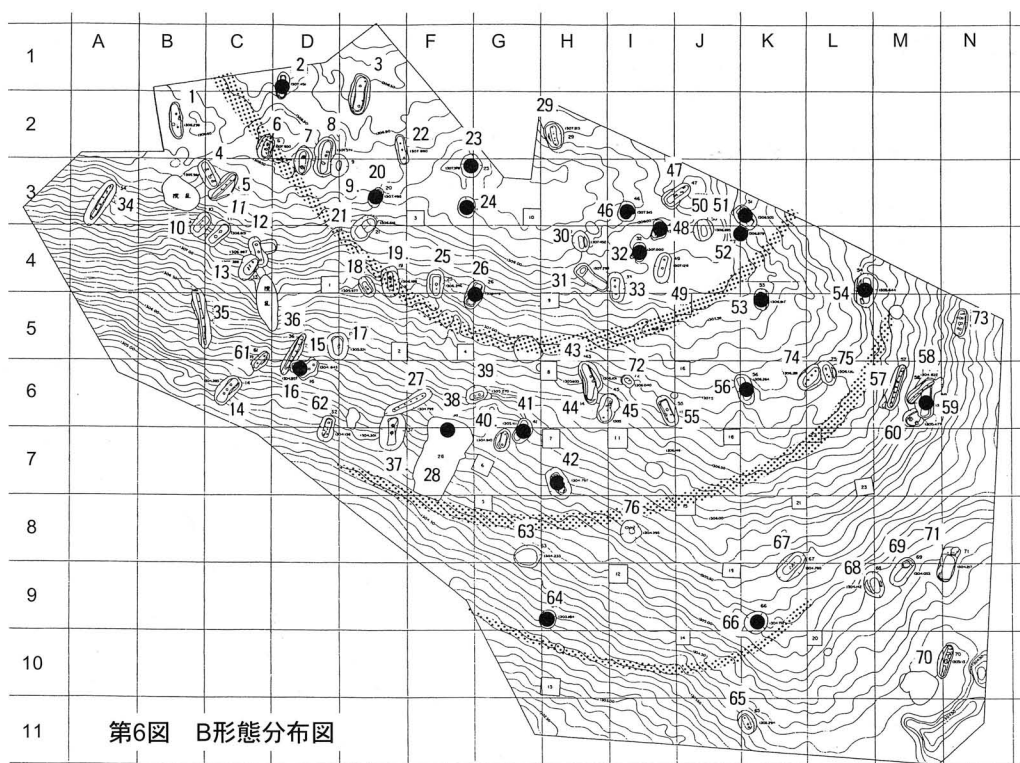
C－3類 NO3.7.11.17.39.43.44.60.61.72（10基の計16基）

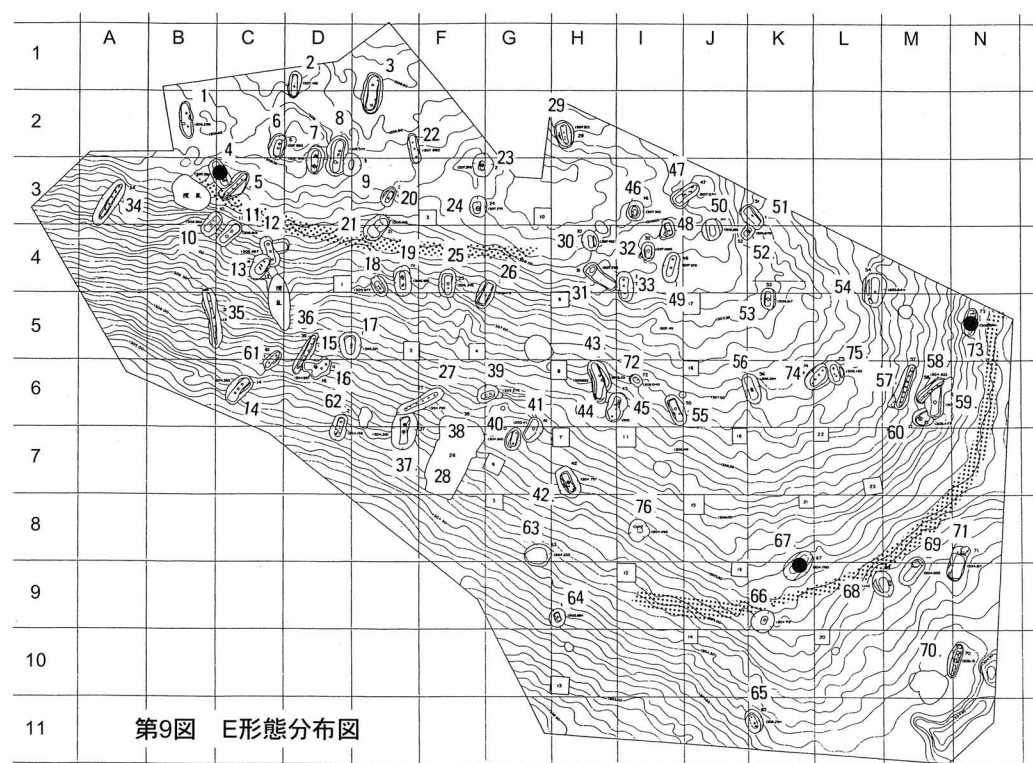
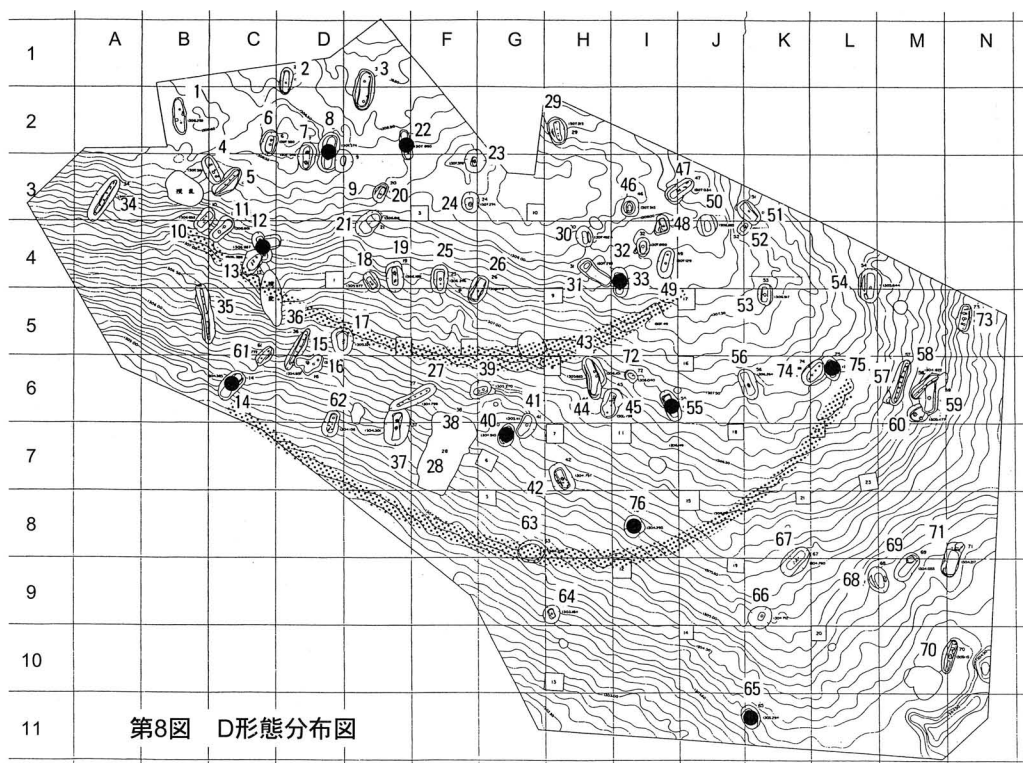
D形態は、C形態と同様で床面の形状で円形を呈するものは認められない（第8図）。

D－1類 NO22.33.55.75（4基）

D－3類 NO8.12.14.40.65.76（6基の計10基）







E形態は、ほとんど長方形を呈するものと思われる（第9図）。

E－1類 NO4.67.73（3基）

F形態は、床面の形状で円形を呈するものは認められない（第10図）。

F－1類 NO10.19（2基）

F－3類 NO1.13.29.45.47.62.74（7基の計9基）

G形態は、平面形が細長いものとし、床面の形状が細長い長楕円形とした（第11図）。

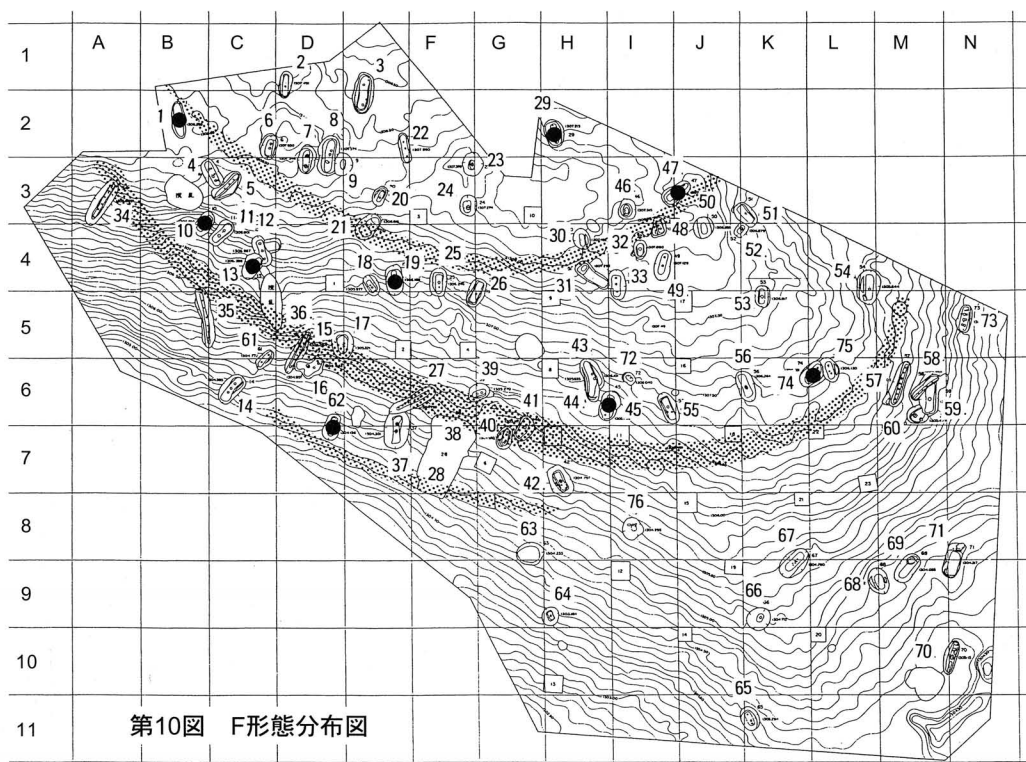
G－3類 NO5.27.28.34.35.36.57.58.70（9基）である。

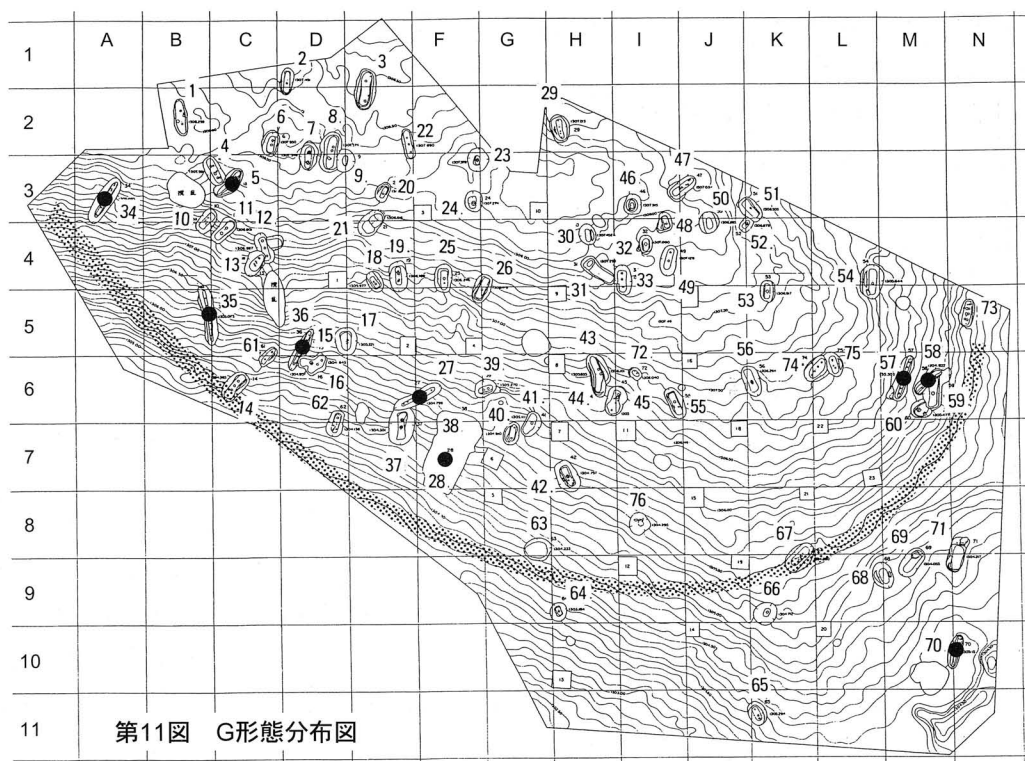
3 各形態別の地形図より見た陥し穴（第2.3図および第5～11図）

陥し穴全ての全体図を地形図に落としてみると、尾根筋から斜面部にかけて上・中・下段の3段に区分されるように見受けられる（第2・3図）。

まずA形態（第5図）については上段部に5基と下段部に4基が分布し、B形態（第6図）は上段部に10基、中段部に7基、下段部に3基が分布する。C形態（第7図）は上段部に7基と中段部に8基、下段部に1基、D形態（第8図）は上段部に4基、中段部に5基分布し、下段部に1基のみ分布する。E形態（第9図）は、上段部に1基と下段部に2基が分布し、F形態（第10図）は上段部に2基、中段部に6基の分布が認められ、1基だけ下段部に位置している。G形態（第11図）は、中段部に8基と下段部に1基の分布が認められる。

次に各形態別で長軸方向を見るとA形態では、斜面に対して長軸が直交するものと平行するも





のことがある。B形態では、斜面に対して長軸が直交するものと平行するものがある。C形態では、斜面に対して長軸が直交するものと平行するものがある。D形態では、斜面に対して長軸が直交するものと平行するものがある。E形態では、斜面に対して長軸は直交する傾向が見受けられる。F形態では、斜面に対して長軸は平行する傾向がある。G形態は、東側では斜面に対して長軸は直交し、西側では斜面に対して長軸は平行するようである。

4 覆土から見た陥し穴の分布（第4図）および陥し穴の重複関係

ここで陥し穴の調査中に、覆土上面の色調の記録を行った結果を記載しておく。

1－黒色土 2－黒色土 3－黒色土 4－暗褐色土（その下は黒色土） 5－黒色土（軟弱）
 6－黒色土 7－黒色土 8－黒色土 9－暗褐色土（その下は黒色土） 10－黒色土 11－黒色土
 12－黒色土 13－黒色土 14－黒色土 15－黒色土 16－黒色土 17－上面はローム（その下は黒色土）
 18－黒色土 19－上面はローム（その下は黒色土） 20－暗褐色土（その下は黒色土）
 21－黒色土 22－黒色土 23－黒色土 24－黒色土 25－黒色土 26－黒色土 27－黒色土（軟弱）
 28－黒色土（軟弱） 29－黒色土 30－黒色土 31－黒色土 32－黒色土 33－黒色土
 34－黒色土（軟弱） 35－黒色土（軟弱） 36－黒色土（軟弱） 37－黒色土 38－黒色土 39－黒色土（風倒木痕内）
 40－黒色土（風倒木痕内） 41－黒色土（風倒木痕内） 42－黒色土 43－黒色土 44－黒色土
 45－黒色土 46－暗褐色土（その下は黒色土） 47－黒色土 48－黒色土 49－黒色土
 50－黒色土 51－黒色土 52－暗褐色土（その下は黒色土） 53－暗褐色土 54－暗褐色土
 55－暗褐色土 56－暗褐色土 57－黒色土（軟弱） 58－黒色土（軟弱） 59－黒色土

60-暗褐色土（その下は黒色土） 61-黒色土 62-黒色土 63-黒色土 64-黒色土 65-黒色土
66-黒色土 67-黒色土 68-黒色土 69-黒色土 70-黒色土（軟弱） 71-黒色土 72-黒色土
73-黒色土 74-暗褐色土（その下は黒色土） 75-黒色土である（第4図）。

重複する陥し穴について新旧関係が明確なものは、NO8.9、NO51.52、NO58.59.60、NO74.75 である。NO8.9 ではNO9 が旧く、NO51と52では52のほうが旧く、NO58.59.60ではNO60が一番旧く、次にNO59、そして次にNO58が掘られている。NO74.75 はNO74が旧い。この新旧関係と確認面での土層の色調を対比させてみると、色調では暗褐色土を呈しその下に黒色土が堆積するものが一番古い陥し穴と考えられ、NO4.9.20.46.52.53.54.55.56.60.74の陥し穴が該当する。

これらの陥し穴をA形態からF形態に当てはめていくと、A-3類にNO9の1基、B-1類にNO20.52.53.54.56の5基、B-2類にNO46の1基、C-3類にNO60の1基、D-1類にNO55の1基、E-1類にNO4の1基、F-3類にNO74の1基がそれぞれに該当する。B形態は20基（第6図）と数が多いためか6基の存在が認められ、特にE形態は、数が少ないにもかかわらず3基中1基が存在しており、床面の小穴の配列の上でも注目される陥し穴の形態であろう。

以上のことから、陥し穴が掘られた変遷を行ってみたい。

まず第1期陥し穴は、覆土上面に暗褐色土を呈する11基のものと考えられ、そして各分類をおこなったA形態からF形態に含まれていることから、一時期にA形態からF形態が掘られたものと考えられる。分布を見ると、東斜面に多く認められるようであり、そして2基を1単位とするような感じが窺えそうである。このことは西側の分布についても言えそうである。

ただし、西側に存在するE形態（NO4）については、単独で掘られたものか、或いは斜面ということも手伝って上層の堆積土を遺構の確認作業中に剥いでしまったのか不明であるが、近くにF形態（NO10）の陥し穴が存在しており、形態も良く似ている。また覆土上面の色調は他と異なっているが、NO17.19は黒色土がローンを囲ったドーナツ状を呈するものであり、このような覆土をもつ陥し穴については、この2基のみしか認められていない。どのような状況であれば、このような堆積がなされるのか不明である。

重複関係を有する陥し穴のNO12.13について、この箇所では番号が付してない陥し穴がもう1基存在し3基が重複している。このことから陥し穴が掘られた時期は、少なくとも3時期あったのではないかと考えられ、そしてE形態が3基あり、そのうちの1基は第1期に掘られたことでも納得のいくところであろう。

以上のことから、遺跡内での古い陥し穴と考えられる遺構は、暗褐色土を覆土とする陥し穴で、また斜面に沿って長軸をほぼ直交させる傾向が窺える。尾根上に位置するNO9については、尾根筋を考えた場合東西への傾斜面に対して直交しているといえよう。NO15.16の重複関係で、NO16の方が旧いというのは、このように長軸が斜面に対して直交する結果からであろう。また東側の一群で、31.33.47等は斜面に対して長軸は平行関係にあり、覆土の色調からも直交するものより新しいものであるといえそうである。西側の一群では、NO16.18.39が直交型で東側の一群NO46.53.54.67.69.71.73.74と共通するものがある。この様なことから、第1期は尾根筋と東側に掘られたものと考えられ、第2期はNO16.18.39.67.69.71.73と考えられる。第3期は、長軸が傾斜面に

対して平行する形態の陥し穴が掘られたものと思われる。その理由として、N074.75 を考えた場合N074のほうが古いことから、N075を掘る段階で既にN074は埋まっていたことが想定されるとともに、この段階でN075の長軸は、斜面に対して平行に近くなっていく傾向が窺えるのである。そして最終的にこの地では、時を隔ててG形態が掘られ、この形態以降陥し穴が掘られることはなかったものと思われる。

5 G形態について

本遺跡のG形態に属するものは、1989年度に発掘調査された『丘の公園第5遺跡』でも発見されており、陥し穴の覆土中に砥石が1点出土している以外、出土遺物は発見されていない。このことは本遺跡と同様で、陥し穴という性格上時期を決める手掛かりとなる遺物の出土はほとんど皆無という点はよく似ている。また報告書中では、掘削工具痕が見られる陥し穴が存在しているということであり、工具痕の部分を石膏による型取りが行われ、保坂康夫氏によってモデリング陽像が作成されており、このことについて考察が行われ、陥し穴の時期は古代以降の遺構として取り扱われている。

本遺跡のこのG形態は、『丘の公園第5遺跡』の陥し穴と同様な形態を有していること等から、時期的にも同時期に含まれるものと考えられる。細長い平面形態を有し、床面には6～7本の杭穴がほぼ等間隔に存在している点など良く似ている。またこの形態の陥し穴に共通していることは、覆土のしまり具合が軟弱であることであり、他のAからFの形態では、覆土のしまりが強く、全く異質のしまり具合である。そして床面に掘られた等間隔の小穴は、他の形態では認められてはいない。このことからG形態は、AからFまでの形態とは時期的に異なっていると考えられるのである。

G形態の細長い陥し穴の長軸方向を第11図から観察すると、まず西側の一群（6基）を取り上げてみた場合、斜面の傾斜方向に対して長軸を平行に持つものが多く認められるが、東側の一群（わずか3基ではあるが）については、西側の一群と全く異なった方向で斜面に対して直交するように長軸がとられている。特にこの形態については、斜面の傾斜方向に長軸を合わせるということではなく、本遺跡を全体的に見渡せば、G形態の長軸はおおよそ北方向に持つのではないかと考えられる。

そして西側と東側の陥し穴で、傾斜方向に長軸をとる西側の一群と、傾斜方向にほぼ直角に長軸をとる東側の一群の存在は、時期的によるものかどうかを判断することはできないが、形態および覆土からすれば時期的な差は認められない。このことから長軸方向の取り方は、斜面に対して無関係に陥し穴が掘られたということになるであろう。このように長軸を南北方向にとるのは動物の行動・習性によるものであろうか。

また、本遺跡の斜面の傾斜角度は西側のほうが急となっており、東側のほうが緩やかであることから斜面に対して無関係であるともいえる。ただし、西側の一群と東側の一群の間には、このG形態の陥し穴は存在しておらず、この点に疑問を感じる。

細長い陥し穴の標高は、1307.2m～1303.1mの範囲内にあり、特に1305mにその集中が認められ

る。形態で特記すべきものは、NO35・70である。まずNO35であるが、この陥し穴は長軸の北の壁にトンネル状の横穴が存在することである。この形態は、本遺跡においてただ1基のみであり、何故このような施設が存在しているのかは不明である。床面には、整然と小穴が7本並び、この点については他の細長い陥し穴と同様な形態を有する。覆土については、しまりの無いものである。そしてこのNO35は、千葉県『土気南遺跡群 III』(P123)の第3.9.10号土坑の施設と類似するものの、本陥し穴NO35では床面に小穴が掘られているが、千葉県の土坑では床面に小穴が掘られてはいない。これは地域的によるものかどうかは不明であるが、本遺跡では1基しか存在していない。

次にNO70であるが、この陥し穴は掘削中に礫がでてきたことによって、放棄せざるをえなかったものと考えられ、陥し穴を掘削する過程を知ることのできる唯一の陥し穴であろう。掘削過程は、まず始めに長軸方向を決め陥し穴を平均的に掘り下げることによって形が決められ、次に南側部分の約1/3の掘り下げが行われたものと思われる。この段階では礫は認められなかったであろう。そして北側を掘り下げる段階となって大型の礫が認められたことによって放棄されたものと考えられ、その結果、形態的には細長い陥し穴となり、床面には小穴があげられないまま放棄されたものと思われる。

6 まとめ

今回の陥し穴の調査では、覆土上面の色調や重複関係および斜面に対する長軸方向によって新旧を導き出すことが少なからず可能であった。そして掘削された1時期の陥し穴の数もある程度限定することが可能であった。また、旧い時期に掘られた陥し穴はG形態を除いた他のA形態からF形態までの覆土上面に暗褐色土をもつ陥し穴が1時期に掘られたことはほぼ間違いないと思われるこれを第1段階とし、2基以上重複する陥し穴の存在NO12.13と番号を付していない陥し穴の重複関係から、最低でも3段階にわたって陥し穴が掘削された可能性が考えられる。

本遺跡は、狩猟の場として陥し穴が掘られ、本遺跡からほぼ西側100mの地点（清里の森第1遺跡）には縄文時代中期中葉の藤内式期の住居跡が1軒ではあるが調査されており、本遺跡との関係を考える上で重要な遺跡となっていくものと思われる。

(参考文献)

山梨県教育委員会『八ヶ岳東南麓遺跡分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第14集 1986

保坂康夫ほか『清里の森第1遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第32集 1987

保坂康夫『丘の公園第5遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第56集 1990

千葉市土気南土地区画整理組合・財団法人千葉市文化財調査協会『土気南遺跡群 III』1993

山梨県教育委員会『清里バイパス第1・第2遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第124集 1997